

平成十七年五月一日発行 第十五巻第五号 通巻第一六七号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成17年5月号



# 魚氷<sup>ひ</sup>に登る

高橋将夫

密院の暗きに春の動きたる  
早春の手ざはりなりし遊び紙  
花篝花から遠くありにけり  
渦潮となり始めたる潮かな

干蝶骨を透かせてあるがまま  
春シヨール新しくとも古くとも  
もやもやと貝母の花のあたりかな  
梅の香と沈丁の香のはざまかな  
雪解けのあとに残りし金ボタン  
氷<sup>ひ</sup>に登る魚にたぢろぎなかりけり  
夢の世の壺焼の腸とりだしぬ

特別作品抄

しゅわしゅわと

植松美根子

春潮の滾つ大橋渡りけり  
駅前広場ひろびろ柳の芽  
初蝶や漢字ばかりの国に来て  
春きざす深山や故宮博物院  
紙皿に惣菜料理あたたかし  
バイパスは通らずにゆく芽木の山  
荳立やカレーの匂ふ小学校  
花なずな始末してゆく犬の糞  
しゅわしゅわと春の空ゆく大鴉  
大寺の屋根かと堤焼かれゐて

# 槐安集

市場基巳

枯れ急ぐ日裏おもての別なくに  
鍼のごと冬めく波のもつひかり  
鳩いつも暖かく聴く死のはなし  
枯草を身にこたへなく踏み立て立つ  
木天蓼と猫が言ふまで知らざりき

水野恒彦

飯詰一語の閑字をふらふ事を知るを流む  
俳諧を拾ふつもりの二月かな  
少年はかなならず老ゆる梅の花  
馬の影になほいろありて雪の原  
春の雁灰にぬくもり残りをり  
胞衣塚より帰つてゐたる日永かな



石脇みはる

春潮のま中動かず槐かな  
渦巻の次々あるるさくらかな  
蒜と菫の畑あり湖西線  
兄達く胸中に帰雁のこゑの残りけり  
春の闇けもの眼動きけり

竹内悦子

降日盛漸く  
寿雪の降る日の薄化粧  
農の家の脱ぎすてられしちやんちやんこ  
動かざる寝釈迦の容りの雲や春  
焦げ跡のそここにあり露の臺  
祝一星の満  
星の渦輪の中にゐる省二かな

木下野生

頂上に五人の女薄霞  
春の山金米糖を大好きで  
指先でつついてあたり薄氷  
うしろからついてくるなり孕み猫  
ポケットに財布飴玉夕霞

延広禎一

神座かみくらと鷹の座ありし虚空かな  
月山や石いだきをる春の蟾ひき蜥き  
喝食の掘りおこしをる春の土  
蛇穴を出でけるところ巫女の列  
宮大工の弾くそろばん梅三分

中島陽華

暗号解説深鮫に鱭ありき  
湧水の白瓜貝ぞ春一番  
吊られける鮫鱈の空晴れ舞台  
提灯鮫鱈業平の影照らし  
照る坊主流るる川の春疾風

栗栖恵通子

二丁目の春泥わたる尾骶骨  
トネリコ主宰「星の渦」上梓の氣息ありけるおぼろかな  
啓蟄や隠しカメラの前にトネリコ「半蔵」ゐる  
その中の生木のいぶり春焚火  
貝楼あらたたくわんつながれり

加藤みき

だんまりと土の上ををる春の鴟  
料峭や垂麻いろの葦屹立す  
葦牙をつつんでゐたる白き闇  
杉菜生に濁りはじめし空があり  
春浅しウサギハットの園児たち

大島翠木

北嶺のすだまなりけり風花す  
雪しまくこつぜんとペガサス駆くる  
梅東風や戦死の汝の老いざりき  
兩岸へかかる朝虹妓王の忌  
湯浴み女の浮世絵よべの春の雪

雨村敏子

玲羊の筆や涅槃の風の音  
後シテは春の衣に鏡の間  
一保堂へ寺町上ル上巳かな  
むらさき真珠ニン月の肌かな  
バツハのフーガ雪みちと星空と



# 槐市集

加藤富美子

鮎子や朝雲海へ流れゆく  
はばたきて鏡の奥の梅ひらく  
浮雲に歳月はなし鶴帰る  
春の雲ひたすら眠る犬の顔  
春の風ふくらみそめし堰の水

金澤明子

風花や旧居の雨戸まはりかね  
初午の餅撒き子らの脛腓  
大玻璃に呼気のとありむめの花  
節分の鬼笑ひをる甘納豆  
箸休め大根なます白子干

北嶋美都里

雪中にライト明滅チエン巻く  
雪の朝丹の爛干埋もれけり  
春浅し池の向かうに立つ煙  
亀鳴くや乾びてゐたる飯の粒  
萵苣掻いて掻いて見上ぐる高さかな

久保東海司

風花が風花を追ひ峽をゆく  
雪吊りやをとこ結びの縄匂ふ  
剖かれてなほ息をつぐ寒の鱈  
水桶に豆腐の沈む鳥曇  
露天湯の笥の勢ひ梅三分





# 槐集

## 高橋将夫選

竜の玉の八方に散る只管打座 枚方

中野京子

声明や呂川に厚き春氷 枚方

谷村幸子

とどかざる日ざし角ぐむ芽の赤し  
春曉の靄をおしゆく湖の面  
神鏡となりたる空の朧なり  
木の芽張り潮満ちてくる時計かな  
冴返る吾が身動きに土星の環

岡崎

近藤喜子

木霊ふれあひ遮那王の山笑ふ  
かぎろひの丘の早蕨なりしかな

近藤きくえ

薄氷やいづれは空へ還るもの  
啓蟄のタクト大きく振りにけり  
金粉を空に撒きくる雲雀かな  
葱の花佛心は臍<sup>はそ</sup>あたりかな  
半仙戲神の山から見ゆるかな  
ムール貝<sup>あぎと</sup>顎に雨のにわかなる  
曼陀羅の影くつきりと梅の花  
大いなる石の寝釈迦や胡<sup>こ</sup>筋<sup>か</sup>ひびく

本多 俊子

淡雪や真昼の闇を漂泊す 安城

天野きく江

金縷梅に真ン中といふ密度かな  
海の水出入りありし獺祭  
不確かに兆しはじめし黄砂かな  
春筍や胎内の子の笑ひをる

# 銀河往来 高橋将夫

「遊戯の器」

◇車のハンドルには遊びがある。車を運転する人なら大抵は知っているが、ハンドルを動かしても車の方向を変えるように作用しない部分のことである。この部分がないと運転手のわずかな手の動きで車の方向が変わるため、直進する時に運転手はロボットのようにならなければならない。また、逆に車輪の動きがダイレクトに運転手の手に伝わり、うつつとうしいことになる。いつてみれば、車輪と運転手の間の潤滑油みたいなものである。もっとも、最近ではラック&ピニオンというのがあり、これには遊びがないそうである。

そこで、遊びの話に入る。梁塵秘抄に「遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけん」とある。槐削刊号に「槐はいま、無礙融通、自在の場」とある。「自由にあそべばよい。さまざまに遊べばよい。時に人を食つてなど、さように遊べばよい。」とは先師の言葉。そうはいっても、俳句は精神の風景。先ずは精神をそういう状態に置けるかどうか分かれ目。そうでなければ、単なる言葉遊びに終わる。

◇「槐集」観照

竜の玉の 八方に散る 只管 打坐 中野 京子  
只管他坐とはひたすら座禅をすること。竜の玉が八方に飛び散ったという…。生半可なことで見えてくる景ではない。

金粉を空に撒きくる雲雀かな 近藤 喜子  
空中高くのぼつて囀る雲雀。まるで金粉を空に撒いているようだという感覚は素晴らしいと思う。

半仙戯神の山から見ゆるかな 本多 俊子  
半仙戯はブランコのこと。神の山があって、ブランコがゆれている。仙人と神がいる。

声明や 呂川に 厚き 春氷 谷村 幸子  
呂川の名は声明の呂曲と律曲に由来する。「厚き春氷」に注目したい。春は薄氷が本情。この日の寒のもどりは相当のものだったようだ。

木霊ふれあひ遮那王の山笑ふ 近藤きくえ  
木霊、山笑ふ…こうして詠まれると、いま話題の鞍馬山もずいぶ格調高く見えてくるではないか。

金纏梅に真ン中といふ密度かな 天野きく江  
金纏梅の紐状の花弁が中央に向かってねじれている様子を詠んでいる。〈密度〉という理屈っぽい表現が、かえって句にふくらみを与えている。

捨ててあるジャガ芋に芽のふきだせり 黒田 咲子  
隼人瓜の形が面白いということで、本棚に置きっぱなしにしておいたら、芽が二本のびてきた。掲句は捨ててあるジャガ芋だから、少し事情が違いますかな。(以下略)